孤独

三好 徹

集英社

1339勝の孤独

一九七九年二月　十　日　初版印刷
一九七九年二月二十五日　初版発行

定価　七五〇円

著者　三好　徹

発行者　堀内末男

発行所　株式会社集英社
東京都千代田区一ツ橋二の五の十
郵便番号　一〇一
電話　出版部　(〇三)三三〇—六二六一
販売部　(〇三)三三八—三六二一

印刷所　大日本印刷株式会社

検印廃止
乱丁・落丁本はお取り替えいたします。
© 1979 T. MIYOSHI
0095-772182-3041 Printed in Japan

＊目次＊

凱旋門賞　5
天皇賞　44
外国遠征　80
ダービー　110
欧州　133

長い手綱　174
夢　212

装丁　司修

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

1339勝の孤独

凱旋門賞

一九六九年（昭和四十四年）十月三日、わたしはパリのオルリー空港に重い旅行鞄をぶらさげて下り立った。日本を発ったのは九月の初めで、すでに一カ月間の独り旅を続けていた。

その長い旅行の目的はすでに果たしていた。だから一路日本へ帰ってもよかったのだが、わたしは、個人的な用のために、わざわざパリへ出てきたのだった。ルーブルやベルサイユを見たいとか、買物をしたいとか、あるいはパリジェンヌの生態にふれてみたいとか、そんな目的ではなかった。パリへ回った目的はただ一つ、二日後にロンシャン競馬場で行われる凱旋門賞レースを見たいからであった。もっと正確にいうなら、この世界的な大レースで、わが野平祐二とスピードシンボリが、各国から集ってくる名騎手名馬に伍して、どんな戦いぶりをするか、ぜひとも見たかったのだ。

日本の競馬ファンには、もしかすると、この凱旋門賞レースよりも、ローレル競馬場（アメリカ）のワシントンＤＣ国際レースの方が知られているかもしれない。

ワシントンＤＣレースには、最近では一九七六年秋に天皇賞馬フジノパーシアが遠征している。それ以前にも、怪物といわれたタケシバオーが二回、またタカマガハラ、リュウフォーレルといった一時代を画した馬が出走していた。そして、スピードシンボリも、一九六七年に日本代表馬として遠征

している。おそらく、これからも、遠征する馬が出るだろう。

では世界的な見地から、この二つのレースを比べた場合、どちらに値打があるかというと、有馬記念とふつうの重賞レース（例えばオールカマー）くらいの違いがあるのである。文句なしに、凱旋門賞の方が大レースなのだ。

まず、歴史が違う。凱旋門賞は一九二〇年にはじまっているが、ワシントンＤＣは一九五二年からである。

これは何も競馬に限ったことではないが、国際的な競技というのは、それ相応の年月をへなければ、超一流にはならないものである。

たとえば、ゴルフなどもそうだ。有名なマスターズ・トーナメントにしても、何年かの歴史があって、初めて世界の四大トーナメントの一つになったのだ。かりにマスターズが一九五二年にはじまったものならば、テレビの宇宙中継をするほどには騒がれもしないだろう。

ここで、ちと脱線するが、マスターズで、日本のプロはどの程度の活躍ができるだろうか。競馬の話を書いているのに、急にゴルフの話になるのは〝逸走〟じゃないか、とお叱りをいただきそうだが、決して関係がないわけではなく、国際試合に臨む選手のあり方やまた勝負とは何かを考える上で、マスターズも凱旋門賞も、共通したものがあるのだ。

わたしの予想をいうと、現状のままでは日本選手の活躍はさほど期待できない。まず第一に、トーナメントのはじまる少くとも二週間前にアメリカに到着していなければ、時差を克服できない。時差のもたらす運動神経への影響は、一般に考えられている以上に大きいのである。スポーツ医学上は、

時差一時間につき一日の回復期間が必要とされている。日本とオーガスタの時差は十三時間なのだ。

さらにいえば、ある程度の英会話力を身につける必要があるだろう。ゴルフに英語は要らないと考えるのは早計で、そういう甘い考えでは、外国で勝ち負けの試合をすることは難しい。馬なら英語が通じなくても走れるが、ゴルファーはキャディと意思を通じあわなければ、どうにもならない。いってみれば、ステッキ（鞭）なしに馬に乗るようなものだ。

その点で、野平祐二は偉かった。カセットテープで勉強したそうだが、きれいな英語を話す。日本を出て、世界に駒を進めようと決心したときに、彼はそういう土台から築き上げたのだ。

話を本筋に戻そう。

パリに着いたわたしは、予約したホテルにいったん寄ってから、すぐにタクシーにのって、エトワールのユニオン・ホテルをたずねた。そこでわたしは、祐ちゃんの祐ちゃんらしくない姿を見てしまったのである。

野平祐二は、ちょうどたき上ったご飯の出来かげんを見ているところだった。ガスがまのフタをあけて、匂いをかいでみる。わたしも鼻をつき出してみた。

ほぼ一カ月間、わたしは一度も米飯の食事をとっていなかった。どちらかといえば、洋食党のわたしは、米飯を食べなくても平気なのだが、一カ月間、米のめしを口にしなかったのは、あとにも先にも、このときだけである。さすがに、わたしも米のめしに郷愁を感じていた。

ところが、ご飯をたき立ての、あの独特の香りがしないのである。わたしは、俗にいう中ゴメで、つまりたき方が不足しているのではないか、と思った。で、そのことをいってみた。

「これ、たき方が足りないような気がするけれど……」
「いや、大丈夫ですよ」
「でも、おコメの匂いがしないね」
「こっちのおコメですからね。おそらくイタリー米でしょう」
イタリー米と聞いて、わたしは、どういうわけか、シルバーナ・マンガーノというイタリーの女優を思い出した。「苦い米」という傑作に出演していて、作中で踊ったマンボが記憶に残っていたのである。そして、あのころからわたしは馬券を買うようになったのだが……。
それはともかく、わたしは、パリのホテルで祐ちゃんがなぜご飯をたいているのか、不思議でたまらなかった。
ホテルは四ツ星マークで、わたしが入った三ツ星よりも上等なのである。部屋の調度も立派だし、おそらくは、いいレストランもあるはずである。また、外に出ても、パリにはうまいものを食べさせる店は、和洋中華を問わず、いくらでもある。それなのに、日本を代表する名ジョッキーがどうして自炊しているのか。
そこへ、スピードシンボリの馬主である和田共弘が包みを抱えて戻ってきた。おかずや果実を買ってきたわけである。
わたしは、イタリー米を敬遠して、祐ちゃんのむいてくれた西洋ナシをごちそうになりながら、スピードシンボリの調子をきいた。
「ドービル大賞典のときは、ナイラ（かぜ）ぎみでボロ負けしたけれど、ここへきて、上向いてきま

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co

したよ」
と祐ちゃんはいった。
スピードシンボリは、五月に日本を出発して、七月二十六日に英国のアスコットで、キングジョージ六世エリザベス女王杯に出た。1着は名牝パークトップ（レスター・ピゴット騎乗）。これも伝統のあるレースで毎年王室ご一家が観戦し、優勝騎手には女王からカップが贈られる。このときも例年のようにイギリスだけではなく、イタリー、フランスからも一流馬が出走していたが、スピードシンボリは5着に善戦していた。
そのあと、英国で流行していたインフルエンザ（馬の）にやられて、フランスのドービルでは、いいところなしに負けたわけである。
「調子が上向いてきたというのは朗報だけれど、でも、祐ちゃんが自炊している姿なんて、サマにならないなア。ホテルのコックに頼めばいいのに」
わたしの遠慮のない言葉に、彼は苦笑しながら、
「コックにいって、たいてもらったんだけれど、どうもたき方がまずくて」
「そうなんだ。祐ちゃんのたいたコメの方がよっぽどうまいんだよ」
と和田が相槌をうった。わたしはいった。
「祐ちゃんは洋食はダメなの？」
「いや、そうでもないけれど」
「ぼくはダメだな」

和田が肥ったからだを揺すっていった。
それで推察できた。どうやら米好きの和田に祐ちゃんがつきあったらしいのである。しかし、心の中でわたしは、こんなことではとても競馬になるまい、と感じていた。
凱旋門賞の出走頭数は二十四頭である。スピードシンボリは、ドン尻かそれに近い惨敗を喫するのではあるまいか。わたしは不吉な予感にうたれた。

二十四頭の馬が競走すれば、どうしたって1着の馬と24着の馬が生ずる。それは勝負だから致し方ない。
だが、凱旋門賞は、参加することに意義のあるオリンピックではない。もともと、競馬とは、オリンピックとは質を異にしたものである。どの馬も、勝つために出走してくるのだ。
そういう見地からすると、近ごろの日本ダービーなどは、本質からずれているように思われてならない。出走することに意義を見出す馬、というより馬主が多すぎる。だから、むやみに頭数が多くなって、本当の競馬にならない。
理由の一つは、三十年も昔に決められた、安すぎる登録料にある。たった一万円というのは、どう考えてもおかしい。
三十年前の一万円はかなりの大金だった。私事ながら、わたしが昭和二十五年に新聞記者になったときの初任給は五千七百円だった。当時の一万円は、いまの二十万円に相当するだろう。いま、かりにダービーの登録料（つまり出走料と同じ意味をもっている）を二十万円にすれば、どうせ勝つ見込

みのない馬は、出走してこないだろう。その方が、よほどすっきりしたレースになるはずである。たった一万円だから、われもわれもと出てくるのだ。こういうバカげたことが、競馬界には、根強く残っている。

その点、凱旋門賞は、そうかんたんに出走できるレースではない。ローレルのワシントンＤＣレースは、主催者から七千五百ドルの補助金が出るが、凱旋門賞は、一切、自己負担である。

馬の輸送費その他の費用を考えると、

（ひとつ、出てみるか）

程度の軽い気持では、とうてい出られるものではない。それだけに、強い馬の揃ったレースになる。

スピードシンボリと野平祐二のコンビは、凱旋門賞の長い歴史のなかで、初めて出走する日本代表だった。また、それにふさわしい実績をもっていた。１着にはなれなくても、いいレースをしてもらいたかった。

勝負というのは、負けるにしても、負けっぷりが大事である。箸にも棒にもかからない負け方をするのでは、勝負をすること自体、最初から間違っているのだ。ことに、競馬のように、ファンの金が賭けられるものは、このことがいえる。

ワシントンＤＣレースについていえば、スピードシンボリ以外は、すべて、ボロ負けだった。消息通の話によると、ローレルの方でも、あまり弱い馬ばかりくるので本当は困惑しているらしいのだが、日本は大事なお得意さん（大金を投じて種馬をどんどん買ってくれる）だから、招待状を送ってくるという。

ほかの国の出走馬は、ローレルの方からの指名だが、日本だけは、指名のない招待だということでも、こうした事情がくみとれる。

スピードシンボリに話を戻すと、自炊している祐ちゃんを見て、わたしは、勝負にならないと思ってしまった。しかし、それを、レース前の祐ちゃんにいうわけにはいかない。そこそこに話を切りあげて、自分のホテルに戻った。

翌日の夕方、わたしは、ホテルの近くのカフェテリアへ行った。市内のいたるところのカフェテリアで、PMUという場外馬券を売っているのだ。

PMU（プミュとフランス人は呼んでいる）には、いろいろな買い方がある。1着から6着まで当てたりすると、いっきょに数千万円の金になったりする。

わたしが選んだのは、六頭の馬を選び、そのうちの三頭が3着までに入れば、配当がもらえる仕組みのPMUだった。

窓口には、数十人の競馬好きがたむろしていた。新聞を手に熱心に検討しているさまは、日本と同じである。

「ムッシュウ」

わたしは中年のパリジェンヌに話しかけられた。

パリの市民には、二通りのタイプがある。

いわゆるお上りさん相手の商売をしているか、それに関係している連中に多いがめついやつ。もともとパリはそれ自体が巨大な観光施設のようなものだから、このタイプは意外と多いのである。読者

のなかにも、パリ見物に訪れて、うわべだけは愛想いいが、その実きわめて不親切なこのタイプに、苦い思いをされた方もいるだろう。わたしも何度か経験がある。

わたしの友人から聞いた話をひとつ紹介しよう。パリの某ホテルでのことだ。

日本人の老夫婦が手紙を出したくて、フロントのマネジャーに、切手をどこで買ったらよいかをたずねた。

この場合、フランス語も英語もできないので、封書を見せての身ぶり手ぶりによる会話である。

「切手は郵便局で売っていますよ」

女性の従業員とのお喋りに熱中しているマネジャーは、つっけんどんに答えた。

老夫婦には、もちろんわからないので、途方にくれている。わたしの友人は見かねて声をかけ、切手代を受けとって、

「わたしが出してあげますよ」

といった。それから彼は、マネジャーを呼びつけた。

「このホテルには切手を置いてないのか」

「置いてないですよ」

「しかし、きみたちが生活できるのは、お客さまが泊ってくれるからじゃないのか。あの老夫婦の手紙を出してあげるのがきみらの仕事だろう。申訳ないことをしたとは思わんのか」

マネジャーはふてくされて、プイと横を向いた。

「よし。きみらがそういう態度なら、ぼくはドイツの友人に電話をかけて、もう一度きてもらうぞ」

キツい一発である。マネジャーは蒼白になったが、もとはといえば自分の不親切が原因だから、唇をかみしめて黙ったそうである。

こういうチップ目当てのタイプとは別に、下町ふうの人情味にあふれた人もむろん少くない。わたしが泊ったのは、モンパルナスに近い所だったので、古き良きパリふうの人が多かった。

声をかけてきた女性もそういう一人とみえて、ブミュの買い方をいろいろと教えてくれる。わたしの買い方よりも、どうせ三頭を選ぶならば、順不同に3着までにその三頭が入ればいい馬券の方が、はるかに高い配当をもらえる、ぜひそうしなさい、とすすめる。

わたしと彼女は、椅子に腰を下ろして、競馬の話をはじめた。わたしはカタコトのフランス語、彼女はカタコトの英語ができる。フランス人でカタコトでも英語の喋れる人は珍しいが、前にアメリカの銀行のパリ支店に勤めていたそうだ。

互いにカタコトでも、話題が競馬に限られると、結構、通ずるものである。

彼女の説によると、こんどは残念ながらフランスの馬はダメで、勝つのはイギリスのパークトップだろうという。

「その馬の評判は聞いている。でも、メス馬が五八・五キロを背負って、そうそうたる顔ぶれのオス馬に勝てますかね？」

「この馬は例外よ。きっと一番人気になると思うわ」

「ぼくはスピードシンボリに賭けたいな」

「オオ、日本の馬ね。あなたは日本人だから、その気持はわかるけれど、この馬はロンシャンを走っ

此为试读，需要完整PDF请访问：www.ertongbook.co